

# 後山山荘の再生物語

谷藤史彦

2017. 04

Vol. 2

## I 崩壊寸前の軀別荘（続）

### 軀別荘の施主

そこで気になるのは、この軀別荘の施主は誰だったのかということである。施主は、江戸初期から続く豪商「くろがねや」藤井家の当主（12代）で、実業家でもあった藤井与一右衛門（1886-1982）（図8）であるということが分かっている。与一右衛門は、藤井厚二と仲の良い3歳年長の兄で、主屋を昭和初期に、縁側を1932年（昭和7年）頃に建て、1960年代まで使っていたという（4）。

福山に生れた藤井与一右衛門は、13歳の時に父を亡くして家督を継ぎ、早稲田大学卒業後、家業の酒造業や製塩業を継ぐとともに、1922年（大正11年）の福山電気株式会社をはじめ、帝国漁網株式会社、日本木材工芸株式会社などを設立するなど実業家として活躍した。与一右衛門は、漕艇や徒歩、登山などのスポーツを楽しみ、福山体育会や福山山岳会も創設している。また、茶の湯や漢詩、絵画鑑賞などを趣味とし、「聴泉、徽泉、士貫、椿荘」といった雅号を持っていた。

その趣味性を表す旧蔵作品がいくつか残されている。ひとつは菊池契月の《楚蓮香》（1918年頃）（図9）という作品（5）で、この共箱には藤井厚二宛ての領収書が入っている。日付は「大正8年1月11日」で、京都市御幸町の京表具師・山田永庄昌堂からとあり、与一右衛門が藤井厚二に依頼して購入させたものであ

ろうと推測される。菊池契月は当時、歴史画、人物画を得意とした四条派の花形作家で、《楚蓮香》も唐の玄宗皇帝の時代、長安一の美人を描いたもので、与一右衛門の気品の高い中国趣味を彷彿させ



（図8） 藤井与一右衛門



（図9） 菊池契月《楚蓮香》1918年

註

（4）川島智生「藤井家と軀別荘と藤井厚二の関わりについて」『日本建築学会大会学術講演梗概集（北陸）』2010年9月、447頁

（5）2007年度に藤井家からふくやま美術館に寄贈されたもの。

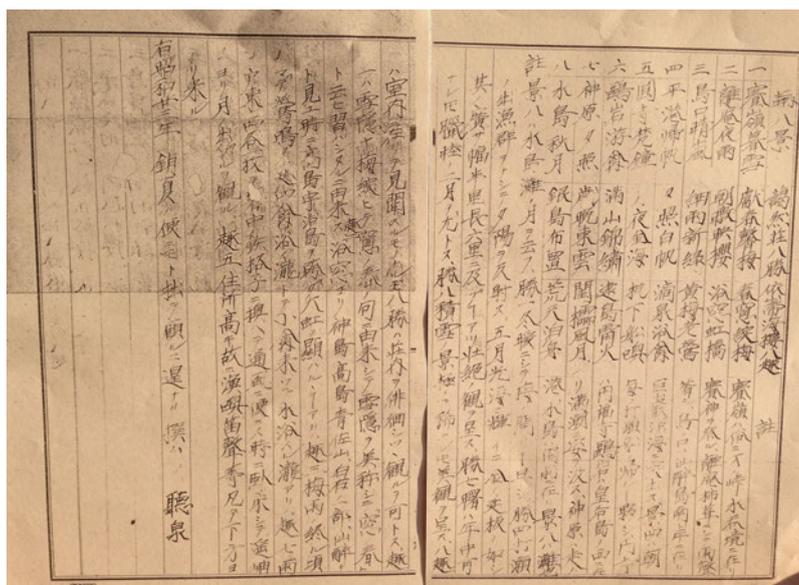
もうひとつは、鞆別荘にあった襖絵（現在、後山山荘所蔵）、結城素明の《琴棋書画襖絵》（図10）である。「琴棋書画」とは、中国で描かれてきた古来からの画題で、日本でも室町時代以降に好まれて描かれてきたものである。風流韻事としての「琴棋書画」、つまり琴を弾じ、棋を囲み、書や画を能くするという文人や士大夫の生活を描いたものである。また、結城素明（1875-1957）は、明治から昭和にかけて活躍した日本画家で、東京美術学校の教授を務め、東山魁夷など俊英を輩出している。最初、川端玉章に入門し、東京美術学校で日本画を学び、さらに西洋画科に再入学するという変わり種で、自然主義的な写生を取り入れた表現を標榜し、次いで装飾的な画

風に移り、中期以降は西洋画的な写実を施した作風を築いていった。素明は、昭和初期に中国に旅行し、その前後に中国画題を描いているので、《琴棋書画襖絵》もその頃の作品と考えられる。

しかもこの襖絵は、鞆別荘のために注文したもの、さらに言えば、藤井与一右衛門が、弟・厚二を通して注文したものと考えられる。与一右衛門が、鞆別荘において文人的な生活したいと望み、厚二が学生時代に絵の手習いで師事していた結城素明に依頼したのであろう。素明も丁度、中国画題を描いていた頃で、「琴棋書画」というテーマも自然に決まったのであろう。この襖絵は、与一右衛門の別荘での生活を物語る重要な資料で、半壊した別荘の中ではなく、倒壊を免れていた蔵の中に専用の桐箱の中に保管されていた。普段使いの襖でなく、正月や来客など特別な時のための襖だったことが幸いしたのである。



（図10）結城素明《琴棋書画襖絵》（部分）昭和初期



（図11）藤井与一右衛門「鞆八景」原稿